

外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会

ニュースレター

第 83 号

2013 年 6 月 1 日発行

[事務局] 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 52 号室

[編集] 在日韓国人問題研究所 (RAIK)

☎03-3203-7575 FAX: 03-3202-4977 E-mail: raik@kccj.jp

郵便振替: 00190-4-119379

ホームページ: <http://www.gaikikyo.jp>

*外キ協は 2012 年 1 月 26 日、「外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会」と改称

◆第 6 回 日独教会協議会 共同宣言◆

ドイツと日本の教会が直面する課題

2013 年 2 月 12 日から 15 日までの 4 日間にわたり、ハンブルクのプロテスタント宣教アカデミーにおいて、第 6 回日独教会協議会が開催された。

日本側の教会代表団は、渡部信（日本キリスト教協議会〈NCCJ〉議長団代表）のもと、11 名。ドイツ側の教会代表団は、ヤン・ヤンセン監督（プロテスタント宣教局 EMW 理事長）とウヴェ・ミチエルセン（ドイツプロテスタント教会連盟 EK D 常議員）のもと、10 名であった。また、スイス・プロテスタント教会連盟 SEK を代表し、セルジュ・フォルネロドが協議会に参加した。

2003 年 9 月に京都の嵐山で開催された日独教会協議会以後、2008 年に世界を席卷した金融危機にもかかわらず、両国の政治的・社会的情勢に際立った変化はない。しかし、社会の変化に起因する教会へのさまざまな挑戦は、この 10 年で両国に顕著である。その挑戦とは、少子高齢化と外国人移住の問題である。

とりわけ、日本に住むすべての人びとにとって、2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災は日常生活のあらゆる領域の深層に触れ、かつて経験したことのない課題に向き合うことになった。またこの震災は、さまざまな国で、原子力エネルギー利用の是非に関する議論を起こした。

●協議会の経過

ヤン・ヤンセン監督による開会礼拝の後、本協議会を主催する北ドイツルター派教会のゲルハルト・ウルリッヒ監督により、現在、ドイツの教会が置かれている状況、とりわけ旧西ドイツと旧東ドイツの教会の相違について、報告がなされた。

協議会第 1 日目の午後、許伯基牧師（在日大韓基督教会）より、少数派である在日韓国人教会の状況、および先の大震災における韓国人教会の活動が報告された。許牧師は、日本のキリスト教会が抱える、災害時の協働の意思決定の困難さを指摘した。また、日本社会における外国人排斥運動の高揚を憂慮した。

第 2 日目は「移民」がテーマであった。クリストフ・アンダース牧師による聖書研究の後、外国人移住問題がドイツ社会と教会に対しどのような変化を促し、また挑戦をつきつけているかという報告がマティナ・セヴェリン・カイザー牧師によってなされた。とりわけ、ハンブルクのような大都市において、さまざまな

言語、教派、霊的な特性を持った教会がお互いに共生し、近年、社会で影響力を増している他の宗教と向き合うことの重要性を訴えた。

市内の教会見学の際、スヴェリンーカイザー牧師は、いかにルター派教会が他の国々、文化のキリスト教徒の存在を正面から受け取り、かつ支えているかを示してくれた。以前ルター派が使用していた教会を他の宗派が使用している現状も、ハンブルクのもう一つの側面である。

東日本大震災で被災した、東北地方の外国人在住者の深刻な状況は、佐藤信行氏（RAIK）によって明らかにされた。被災者には、日本人と結婚した中国、フィリピン、韓国の女性が多く含まれている。とりわけ、語学の習得や介護の研修機会を与えること、そして就職を支援することなど、このような人びとに援助の手を差しのべることは、日本の教会で義務とみなされる。

第3日目の午前中、日本とドイツの両教会は少子高齢化社会の問題を共有した。マーレン・フォン・デア・ハイデ牧師は、平均寿命が伸びている現象をチャンスとして受け取るEKDの取り組みを報告し、教会は、このような状況を介護福祉分野でのディアコニー的挑戦と受け止め、とりわけ認知症患者とその家族への支援が大切であると述べた。

西本玲子氏（日本YWCA）は、福島県の被災者たちの声を聞かせてくれた。西本氏は被災者たちがどのような困難な状況と向き合っているかを語ってくれた。多くの人たちは支援を必要としている。しかし、置かれている現実に懸命に取り組んでいる人もいる。彼女は、他県の空き家に子どもたちと家族が一時的に住むことができるセカンドハウス・プロジェクトを立ち上げており、放射能汚染の被害者に長期間にわたり寄り添うべきであると報告した。

午後は宣教的挑戦が議論の中心となった。クリストフ・アンダース牧師による神学的導入の後、内藤新吾牧師（日本福音ルーテル教会）によって、日本では少数派であるキリスト教会が原発に反対する様子を報告した。内藤牧師は1993年以降、原発に反対する宗教者のネットワークに参加している。不正に異を唱える際、少数派であるキリスト者はまさに宣教的である。

ベルリンのミハエル・ユシュカ牧師は、小さな子どもを持つ若い家族に向けた教会活動のモデルを報告した。ドイツの国民教会の枠内で、この方法は、従来は教会から離れていた若年層に訴えかけることができる」と説明された。

●最終宣言

第6回日独教会協議会を通して、私たちは民族的、宗教的に少数派に属する人びとに対して、深い関心と感受性、責任意識を持つべきであるという認識で一步前へ進むことができた。聖書の証を共に聞くことにより私たちは、故郷を追われ、私たちの国に住むことを求めている人びとと連帯すべきことを知る。

また私たち教会は、東日本大震災の被災者——特に放射能汚染の被害者、女性、子ども、外国人——の苦境を覚え、支援の継続を確認した。

ドイツ政府が、前政権の決定した中期的な脱原発政策を一度撤回したものの、福島原発事故を受けて、先の政策に立ち返ったことに、私たちは注意を喚起した。同時に日本政府は原発事故の直後、すべての原発を停止する決議をしたが、後にこの決議を撤回したことに注意を喚起した。

ドイツと日本のプロテスタント教会は、原子力エネルギーから完全に離脱し、再生可能かつ持続的で安全なエネルギー源への移行を目指すエネルギー政策を、明確に支持する。原子力エネルギーの使用がもたらしている社会的問題、人権侵害、また平和への脅威は、私たちの確信をさらに強めさせる。原子力エネルギーの使用が、次の世代に計り知れない危険を残してしまう事実も、キリスト者として私たちは見過ごすことはできない。

福島原発事故の教訓から、ドイツと日本のプロテスタント教会は、数十年前から維持し今後も強化すべき互いの関係の重要性と必要性を再認識した。私たちは祈りの中で結ばれることを望み、日本が直面している

問題が他の先進国でも発生しうることを思えば、さらなる情報共有と人的交流が重要であるとする。

私たちは、近い将来、規模は小さくても双方の訪問団がより頻繁に会合を持ち、相互関係をさらに深めていくことを望む。

私たちは、本協議会で話し合い共有された内容を、それぞれの国、それぞれの教会に広く知らせ、支持していく。

* 一部を割愛

◆「外国人住民基本法」の制定を求める第 27 回全国キリスト者集会：2013 年 1 月 26 日◆

メッセージ

名を呼ぶ神に応えて

●松浦悟郎

(日本カトリック難民移住移動者委員会担当司教)

少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった。ある日、エリは自分の部屋で床に就いていた。彼は目がかすんできて、見えなくなっていた。まだ神のともし火は消えておらず、サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。主はサムエルを呼ばれた。サムエルは、「ここにいます」と答えて、エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言った。しかし、エリが、「わたしは呼んでいない。戻っておやすみ」と言ったので、サムエルは戻って寝た。主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」と言った。サムエルはまだ主を知らなかったし、主の言葉はまだ彼に示されていなかった。主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。」サムエルは戻って元の場所に寝た。主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ。」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」主はサムエルに言われた。「見よ、わたしは、イスラエルに一つのことを行う。それを聞く者は皆、両耳が鳴るだろう。(サムエル記上 3 : 1~11)

一昨日(1月24日)、私たちは石巻市、南三陸町のほうをバスで回りました。石巻を通ったとき、私は震災の半年後に石巻に行ったことを思い出しました。石巻の教会にいた一人の神父さんが、そのときこんな話をしたのです。

「つい先日、津波で子どもを失った母親が、半年経ってから、死亡届を役所に出した」と言ったのです。

その半年間、子どもを失ったそのお母さんは、

どんな思いで過ごしたのでしょうか。子どもの死を受け入れることができなかったのだと思います。そして、何度海に向かって自分の子どもの名前を呼んだことでしょうか。

でも、半年経ってお母さんは死亡届を届けました。その神父さんが言うには、「そのお母さんは、もうこのままだったら駄目だ。私は生きていかなければいけない」という思いで届けた、と。そのことを思うとき、そのお母さんの心の中にどんな

思いが半年間あったのだろうかということが、ずっと私の頭の中に残っております。

半年経ってお母さんは、この子は生きていない、ということを受け入れたり、諦めたからではないと思います。ずっと子どもの名前を呼び続けた。そして、立ち上がれないお母さん。しかし、もしかしたら長い時間かけて、その子は確かに触れることはできないけれども、お母さんの心の中で生きていたのかかもしれない。子どもの名前を呼び続けていたけれど、じつはその子どもが、「お母さんは生きて。お母さんは生きてほしい」……と言う声が聞こえたのかもしれません。そのようなことをいろいろと思い浮かべるわけです。



名前を呼び合うことで、その声が届くことで、人は生きようとする。そのようなことを思います。生まれたばかりの赤ちゃんに、両親がニコニコしながら語りかけます。赤ちゃんは目をぱっちり開けて、自分の名前を呼ぶ親を見て、ばたばたと手足を動かして応える。そのような場面をよく見ます。ある本の中で、次のように書かれていました。「子どもは無垢、つまり何も知らない状態で生まれる。そのときに親が名前を呼ぶと、子どもは嬉しくて応えようとする。その赤ちゃんはどう感じるか。親の目を見て、この人は他の誰でもない私に向かって声をかけている、私に向かって微笑んでいる、直接私に語っている、ということを感じ、赤ちゃんは感じる。それに応えたいと思うから、言葉を覚えていくのだ。赤ちゃんが言葉を覚えていくのは、名前を呼ばれて応えたいからだ」

その本の中では、アブラハムとモーセについても、書いてありました。

「アブラハムもモーセも『ここを出なさい』という神の言葉を聞き、それに応えて、これから先ものすごく不安があり、何も予定が立たないにもかかわらず、その安定した地から旅立っていくという原動力はどこからくるのでしょうか。それは、神が他でもない私の名前を呼んだ、いっぱい人がいるのに、他の誰でもない私に向かって名前を呼んだ、『民を引き連れてここを出なさい』と。それは、地鳴りのするような衝撃で、それが私を突き

動かして立ち上がっていくというようなことではないか」



10年前に、60歳くらいの一人の女性が私のところに来ました。彼女はこう言うのです。

「今までいろいろボランティアをしてきました。けれども、ある日、アフガニスタンの子どもたちの写真を見た。言い知れぬ思いが自分を動かしていった。この子たちのために何かしたい、それを抑えきれないのです」

そして、私にこう言いました。

「あと10年くらい私は元気で何とか動ける。アフガニスタンに行きたい」

本当に、その方は一人で行きました。そして、今は一つの会を立ち上げ、親を失った子どもたちの施設、100人くらい住んでいると思いますが、その施設を建ててずっと働き続けているのです。たいへん危険なところですけど、何がその方を動かしたのだろうか。まさに、その写真の中の子どもが彼女に向かって名前を呼んだのではないのでしょうか。私はここにいる、と。そして、それを受け止めたとき、その女性はそれに応えていく。

もちろん人によっては、どこに響くか全く分かりません。その方は、なぜか分かりませんが、アフガニスタンだったのです。でも、ある人は全然違うところに動かされる。それは一人一人にしかない、言ってみれば召命のようなもの、使命のようなもの、その人らしい応え方の表われだと思えます。そうやって人間は動いていくのだと思えます。先ほどのお母さんも、生きようと思ったのは、その子どもからの声があったのではないか。

私はこう信じています。神は一人一人の名前を呼んでいる。モーセやアブラハムだけではなく、すべての人、一人一人の深いところに向かって名前を呼んでいる。それを我々はいろいろな形で受け止めながら、おぼろげながら、誰が呼んでいるか分からないけれども、何か感じながら人は生きていくのではないかと、思っています。

でも、じつは私たちは聞いています。どこで聞いているのでしょうか。それは、人と人がその人に向かって名前を呼ぶときです。我々は一生の中

で、どれだけ自分の名前を呼ばれ、どれだけ人の名前を呼んでいるのでしょうか。そのやりとりは、神が私の名前を呼んでいることの具体的な印、人が私に向かって名前を呼ぶとき、その背後に、その声を通して呼びかける神の声がある。神が、私の名前を呼んでいるのです。ああしてほしい、こうしてほしい、ということではなく、赤ちゃんにお母さんやお父さんが呼びかけているその波動を、赤ちゃんが真正面から受け止めて応えようとするように、神が私の名前を呼ぶことに私たちは応えたいと思うから動いていくのだと思います。具体的には人の声だと思えます。



でも今の社会は、名前が消えていく、顔が消えていく社会じゃないかと思えます。浜矩子さんという経済学者がこんなことを言っていました。

「リーマンショックで金融が破綻したあの原因は何か。経済から、金融から人の顔が消えた。信用で成り立っている貸し借りが一つの債権となって売買していくあのリーマンブラザーズの現象。つまり、経済活動の中に人の顔が消えた。もはや数字でしかない、もはやこれはお金を売るためのペーパーでしかない。その背後にどんな思いで生きているか、なぜそのお金を借りなければならなかったか、顔が見えなくなった。その顔が見えなくなっていることが、この社会の中にもものすごい勢いで広がっている」

今の戦争は、「オフィスに出勤して戦争する」と言われています。つまり、遠いところで戦争しているのに、自分は近くのところに出勤してコンピュータでボタンを押すと、何千キロも離れたところで無人のヘリコプターが爆撃をしていく。そして本人はタイムカードを押して、家に帰る。そんな戦争のあり方というものが始まっています。どこまで人間の顔が消えていっているのだろうか、ということをおもいます。



その中で私たちは、名前を呼んでいく、その人の顔を見つめていく。直接、他の誰でもないあなたに向かって、その人が認知症であっても、あるいは昏睡状態で意識がないといっても、その人の名前を呼び続ける。その人の深いところの命に声が届いたら、その人は生きようとするのです。立ち上がろうとする。

今回、被災地に来て、どれだけたくさんの方が先ほどのような思いを持って今も生きているのだろうか、とても私たちには知るよしがありません。知る術がありません。けれども、今日聞いた証言や、私たちが目の前に接した一人の声を通して、その背後にいる一人一人を、数字ではなくて一人一人の名前を呼び続けながら、私たちも一緒に歩んでいきたいと思えます。

●文責＝編集部

3・11——外国人被災者の証言

●庄司マリーン

(フィリピンコミュニティー ミヤギ)

私は、日本に来て38年になり、一人息子がいます。いま私は、カトリック元寺小路教会に通っています。私は日本に来てから、ずっとボランティアをしていました。36年前はたくさんのタレントなどが仙台に来て、その方々の役に立つようにサポートしました。

3・11のあと、フィリピン・コミュニティが立ち上がりました。仙台では389名、宮城県ではだいたい1000人くらいのフィリピン人が住んでいますが、フィリピン・コミュニティのメンバーは仙台が110名くらい、あと福島、南三陸、石巻、陸前高田にもコミュニティがあります。

じつは私も一人の被災者なのです。震災のときちょうど町にいて、友達と一緒に食事をしていました。大きな地震が来たとき、小さな部屋にいたので地震だということがすぐに分かりました。これが2回目の体験で、1976年の仙台沖地震も体験しました。そのトラウマは、今でもなくなっていない。そのトラウマが重なって、今でも私の心の中にあります。いつも体が揺れていて、いつも地震が来ているような感じです。

私の家も流されました。たまたま私はそのとき家にはいませんでした。3日後に初めて自分の家がなくなったことを知ったのです。そのときも、すごくショックでした。リフォームしたばかりの家で、将来の老後のために準備したものでしたが、一瞬で家が流されました。

一番悲しかったことは、私の大事な近所の方々が亡くなったことです。いま思い出しても、本当に悲しいです。私の近所の方々が53名が亡くなったのですが、そこに仕事などに来ていた人も150名、だいたい305名が亡くなりました。近所の方で、50歳近くになって結婚して、やっと幸せになった方がいたのですが、その妻が亡くなってしまったのです。その人から幸せが奪われてしまいました。

だから、この体験は皆さんに伝えたいのです。なぜかという、地震から津波が来るまで、45分もあったのです。なぜ、日本の政府はその人たちに伝えなかったのか。今でも悔しくてしょうがないです。私だけではなく、みんな同じ気持ちだと思います。

フィリピン人も韓国人も中国人も、みんな大変な体験をしましたが、力を合わせて、その悲しさと体験を伝えていきたいと思っています。

【2013年1月26日・全国集会】 ●文責＝編集部

わたしたちが被った苦難

●中家 盾

(外国人被災者支援プロジェクト運営委員／日本キリスト教会栃木教会牧師)

兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これから救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。《コリントの信徒への手紙二 1 章 8～11 節》

因果応報という合理主義の行き着く先

2011年3月11日の東日本大震災に際して、皆さんがどのような苦難を味わわれたのか。また、その苦難を経て、今どのように過ごされているのか。それは一人一人によって異なることでしょう。

そういった苦難に対して、どのように答えを出していけばよいかということを論じている書物にヨブ記という書物があります。その冒頭には「ウツの地にヨブという人がいた。……彼は東の国一番の富豪であった」（ヨブ 1 章 1 節、3 節）との一文が出てきますが、ヨブがどのようにして富豪になり得たのかに関する詳細な説明はありません。もしかすると、誰よりも多くを持つ者となったヨブが、じつは、誰よりも多くを奪い取る者であったとの説明も不可能なことではないのかも知れません。

ただし、ヨブは自然災害や人災によって、家族や財産のすべてを一日にして失います。しかも、そのことがたたってのことなのでしょう。後日、ヨブはひどい病にかかります。もしこの時、ヨブの傍らで労わりと慰めをもって共に歩んでくれる人がいたならば、ヨブの心も少しは晴れたかも知れません。しかし、まったく皮肉なことに、同じ家族でさえヨブに辛辣なことを言い、ヨブの友人たちもほとんど役に立たなかったのです。この点から、被災者支援や被災地ボランティアの難しさを考えずにはられません。

そのような苦難の中であって、ヨブは自らがこの世に「存在する」ことの意味、自らがこの世で「生きていく」ことの意味、自らの身に襲いかかることとなった「苦難」の意味を問うていくわけですが（ヨブ 3 章参照）、特に重要な要素を「ヨ

ブが、利益もないのに神を敬うでしょうか」（ヨブ 1 章 9 節）との一文の中に見出すことができます。すなわち、この一文が提起していることは、「よいことを続けていけば利益となり、悪いことを続けていけば損をする」との因果応報に基づく合理主義で全てのことを読み解くことができるはずだということなのです。非常に分かりやすい、理の通った考え方だと思われそうですが、この考え方が現代社会にあって幾つもの破綻をきたしているのもまた事実です。

①その一つは、「利益になることだけに力を注ぐ」との合理性を追求し過ぎた結果、愛や優しさが抜け落ち、多くの人々が切り捨てられていくようになったとの問題です。

②また、人間が持つこととなった理性や知恵や力を用いて、完璧な合理性を追求していく姿勢には限界があるという点についても考えてみる必要があるでしょう。

③そこでは歪みや軋みが生じているのであって、いつしか「利益を得るのは悪人であり、損をするのは善人である」といった矛盾や不条理が私たちの世に横行するようにさえなっているのです。

こういった要素の絡み合いを私たちは原発事故の中に見出すことができるのではないのでしょうか。

苦難の意義

これらの問題に対して、長い沈黙を破って、ようやく神が答えておられる場面がヨブ記 38 章です。「わたしはお前に尋ねる。わたしに答えてみよ。わたしが大地を据えたとき／お前はどこにいたのか。知っていたというなら／理解していることを言ってみよ」（3～4 節）。同じようなことは、ヨ

ブ記 40 章 2 節、40 章 7 節、42 章 4 節にも出てくるのですが、ここで神が言おうとしておられることは、「ひとたび生じてしまったことに対して、[神に向かって]、[誰かに向かって]、[人生に向かって] 文句を言い、その責任を押しつけたところで何か一つでも元に戻したり、生み出したりすることができるのであろうか。もしできないのであれば、ひとたび生じてしまったことを [自分に向かって] 与えられた計画として受け止め、そこから何が生まれるのかをじっくりと考え、最善を尽くせばよいのではないか」ということです。

そうこうしている内に、いつしか自らの思いや経験に制限されていた小さな世界から飛び出し、これまで味わったことのない大きな世界へと羽ばたくようになるはずなのです。苦難は神の領域への誘いなのです。

コリント教会内にあった様々な問題

さて今日は、コリント後書 1 章 8～11 節を通して苦難の問題を更に深く追求していこうと思っています。コリント後書 1 章 8 節に「兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい」と出てきますように、コリント教会の中には [身分の差] や [民族の差] などによる様々な問題がありました。また、コリント教会内にあった [熱狂主義者] や [ユダヤ主義者] とどのように折り合いをつけ、いかに教会を「一つ」(1 コリント 10 章 17 節、12 章 12～13 節) の「キリストの体」(1 コリント 6 章 15 節、12 章 27 節) として立て上げていけばよいかということも大きな課題でした。

コリント前書のほうでは [霊] [肉] 二元論の中で「我々はもう既に完全な [霊] を受けている。従って、もはや、不完全な [肉] には縛られない」と言って、[肉] を切り捨てた [熱狂主義者] のことが取り上げられ、コリント後書のほうでは「我々がより完全な者となる為に [霊] で始めたものを [肉] で仕上げなくてはならない」と言って、[肉] に固執した [ユダヤ主義者] のことが取り上げられているのです。

問題を共有することの必要性

今、問われていることは、「それらの問題をどのように共に担っていけばよいか」ということです。問題の渦中から、やっとの思いで発せられた当事者の声に耳を傾ける。このことが何よりも大切なことであるように思われますが、現実はそうたやすくありません。中央にいて権力を握っている者のあり方や価値観が、周辺にいて権力を握ることのない者に押しつけられるということがしばしば見られるのです。

この構図はキリスト教界にも見られるものであり、20 世紀に至るまでヨーロッパや北米の教会は「自分たちの神学こそが福音にまで引き上げられた声であり、自分たちの教会の務めはキリストの十字架による罪の赦しを [垂直に、霊的に] 宣言することにあるのだ」と信じてきました。その結果、キリストが [水平に、肉的に] なしてくださった愛の支配がどこかへいってしまうということも生じたのです。

南アフリカ共和国における 1984 年の人種別三議員選挙がそのよい例です。白人政権がカラードであるインド系住民にも参政権を認め、そのことによって黒人たちを一定の地区に押し込め、分断させようとした。その際、白人が多数を占めるオランダ改革派教会が語ったことは、「(われわれは) この平和で安全な生活がおびやかされ、自由が危うくなり、黒人が支配的になるのを見ている。…われわれはあらゆる形での統合に反対する。…白人が神によって南アフリカに呼ばれたというわれわれの運命を、神は再確認させ、思い出させている」(『福音と世界』1986 年 9 月号、10 月号) ということであり、その主張によってアパルトヘイト (人種隔離政策) は推進されたのです。

そのような方向性に対して、今日試みられていることは、福音をアジアやアフリカや南米の文脈で読み直すということです。「苦難の中にある自分たちの中にこそキリストは共にいてくださり、生きて働いてくださる。だからこそ、自分たちはキリストを語る事ができるのであり、キリスト

の働きに連なっていくことができるのである」。この主張が語っているように、現場にいる者にしか体験できないもの、語り得ないものがあるのであって、それが固有の「個」を成り立たせ、「公」の構成要因とならせるのです。

問題を共に担っていくことの難しさ

もちろん、「現場の声によく耳を傾けながら事柄を推し進めていこう」ということに対して、慎重にならなければならない側面がないわけではありません。例えば、現場は無数にあるのであって、どれか一つだけを絶対化する訳にはいかないということは踏まえておくべきことでしょう。また、現場にあって「これこそ神が命じておられる大切な課題だ」と声高に唱えていることが、じつは世俗的な理念や主義主張に影響されてのものであったりするという倒錯もしばしば見られることです。

また、現場に行く中で感じさせられることがあります。それは現場にいる者と現場にいない者との落差・差異の大きさです。支援者の多くは「被災をした」者でもなければ、「移住してきた」在日外国人でもありません。また、日々現場に留まり続けたり、未永く課題を共有し続けたりすることができるわけでもありません。その点において、支援者は無力なのです。

今回の震災の出来事を通して、教会の中には「三位一体の神御自身が持っておられる交わりという本質に押し出されるようにして、教会は世と結びつき、世に仕える教会となる」との側面が出現しました。しかし、その側面はどこまで本物となり得たのでしょうか。「外国人被災者のことを同情や憐れみの対象としては見る。けれども、一緒に歩んでいき、出来事を造り上げていく仲間とは見なしていない」という現実、いまだ残されたままなのではないのでしょうか。

神の救いの内実は何か

もしかすると、その原因の一つは贖罪論の捉え方にあるのかも知れません。十字軍や黒死病が持

つ暗いイメージの中で、中世の西方教会は「死＝罪の罰」と見なす傾向を強め、これをどう克服するかということに全力を注ぎました。その結果、いつしか「個人の魂の救済こそが神の救い」の部分が強調されるようになったのです。キリストの生涯における「十字架」の部分にのみ注目が集まり、「人格や業」の部分が欠落していく。その結果、神の救いというものが罪からの解放という法的なもの・観念的なものに限定されるようになってしまったと言いたいのです。

その点、日本の教会はどうであったでしょうか。第二次世界大戦後、日本の教会は自分たちの信仰が天皇制という偶像に対抗するほどの強さを持っておらず、アジア諸国への侵略を正当化し、アジア諸国を踏みこみじった罪をどのように処理すればよいかという問題に取り組みざるを得ない状況に置かれました。その文脈の中で、キリストの十字架による罪の贖いを強調する新約聖書がもっぱら用いられるようになっていったとしても、それは不思議なことではありません。しかし、問題の根はもっと深い所にあるのではないのでしょうか。もう既に、理想や理念ばかりを追い求めて、少しも地に足をつけて歩もうとしない非歴史的霊肉二元論的なあり方、自分一人の魂の幸福を追い求めるような個人主義的なあり方が西方教会を蝕んでおり、それがナチス・ドイツによる旧約聖書の民ユダヤ人虐殺のようなことを生み出してしまったとするならば、第二次世界大戦以前から新約聖書偏重の重体にある日本の教会が、今後、在日外国人に対してどのような態度を取るかは大いに考えさせられることです。

「わたしたち」という視点に立って

「当事者でない故に苦難を負うことはできない」。「当事者から遠く離れている故に苦難を負うことはできない」。そういう言い方は、苦難と一緒に負おうとはしない自己中心さに基づく言い訳に過ぎないのかも知れません。それに対して、使徒パウロはコリント後書 1 章 8～11 節の中で「わたしたち」という言葉を何度も用いています。コリント

教会における種々雑多な問題を前にして、使徒パウロは「これは彼の問題であって、彼だけで解決すべき問題だ」とも、「これは私だけの問題であって、私だけで解決する問題だ」とも言っていないのです。あくまでも、これらの問題は「わたしたち」の問題なのであって、[身分の差]、[民族の差]を超えて、[熱狂主義者]と[ユダヤ主義者]も一緒になって解決しなければならない問題なのだと言っているのです。ここには「苦難を個人化しないように」との勧めが含まれています。というのも、誰かを批判し、自分一人に閉じこもってしまうあり方からは前に進む力は湧いてこないからです。

苦難の中で、打ちのめされ、弱くされていく使徒パウロ。しかし、その中で徐々に芽生えていったのは、打ちのめされ、弱くされているという点において全ての者は「同じ」という意識であり、打ちのめされ、弱くされている者をキリストは等しく救ってくださるという点に立ちさえすれば「一つ」になれるという意識です。自分のあり方に行き詰まりが生じる中でこそ、「死人をよみがえらせて下さる神」(Ⅱコリント1章9節)が生きて働いてくださるのです。

今、なぜ教会は外国人被災者と関わるのか

今、外国人被災者たちはとても過酷な状況の中にあります。それは、まず第一に地震や津波に因るものです。また、在日外国人であるということで、聞き取るべき情報が聞き取れなかったり、受け取るべき権利が受け取れなかったりという問題もあることでしょう。

しかし、それ以上に大きな苦難はアジアからの移住女性たちに対する軽蔑や排除の論理にあるものと思われます。「耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失って…死の宣告を受けた思いでした」(Ⅱコリント1章8節)とも言うべき苦難が、日本人の手によって増幅され、アジアからの移住女性たちの上にばらまかれている。もしそうだとするならば、それでもなお「在日外国人だからということで特別扱いしてはならない」

ということが言えるのでしょうか。むしろ、私たちの教会は「単なる支援者、単なる傍観者として、漫然と外国人被災者と向き合う」のではなく、「これらの問題を時間をかけて生み出してしまった[加害者]の一人として、時間をかけて責任をもって外国人被災者と向き合っていかなければならない」のではないのでしょうか。御言葉によって自らの「加害者」性が暴かれ、悔い改めをもって神の恵みに結びつけられ、「被害者」である隣人との関係を回復していくという和解なくして、真の回復は得られないのです。

「加害者」と「被害者」の枠を超えて

さらにつけ加えるならば、世界教会協議会世界宣教・伝道委員会編『和解と癒し』の中には「より広範な紛争状況においては、犠牲者は後に加害者となる場合があり、逆に加害者が犠牲者となる場合があり、明確な区分(犠牲者/加害者)はあまり有益ではない。キリスト者は…犠牲者の苦しみに対して特別な配慮をするが、和解と癒しにおいては、犠牲者の癒しと回復と同時に、加害者の悔い改めと変革が求められるのである」との一文が出てきます。ここで示されているように、どちらが「被害者」であり、どちらが「加害者」であるかということの判別はつきにくいものなのです。つまり、私たちすべての者は、一つ一つ事柄、一つ一つの関係に対して、「被害者」としてばかりか「加害者」としても関わっている可能性があるものであって、一つ一つの事柄、一つ一つの関係に対して他人事ではいられないはずなのです。

私たちすべての者は繋がっている。もしそうだとするならば、仮に片方が回復したとしても、もう片方が回復しなければ、全体としてはいまだ回復していないということになります。したがって、もし全体としての回復を願うならば、私たちすべての者はそれ相応のプロセス(真実、記憶、悔い改め、正義、赦し、愛)を経る必要があるのです。

「個人の魂の救済」としての十字架ばかりか、
「世界の和解の基」としての十字架へ

「神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちに委ねられたのです」(Ⅱコリント5章19節)。キリストが私たちの[加害者]性を負うために[被害者]の一人となって十字架にかかってくださった。この和解の業によって、私たちは再び神の御前に立ち、神と結びついて生きる者とされました。キリストの十字架がもたらす罪からの解放という救いは[個人の魂]に留まるもので

はなく、[神と人との和解]、[人と人との間の和解]、そして、[世界の和解]にまで及ぶのです。この終末論的希望に満ちあふれた「和解の言葉」に仕えることが、私たちに共同体性をもたらし、世界に平和と一致をもたらし、福音宣教の前進を促すのであれば、今こそ私たちは「和解の言葉」に仕えることに専心したいものです。

***本稿は、第27回全国協議会(2013年1月24～25日)での聖書研究をまとめたものです。**

横浜で「プレ青年の旅」—1日現場研修プログラム

2013年5月11日、外キ協青年の旅実行委員会主催による「第1回 多民族・多文化共生を考える1日現場研修プログラム」が行なわれた。私たちの暮らしに身近なところから「多民族・多文化共生」の課題に触れていこう——。今回のプログラムは、そんな趣旨から実施された初めてのフィールドワークであり、日本基督教団・日本キリスト教会・在日大韓基督教会・聖公会などから計14名の青年が参加し、神奈川県横浜市中区近辺の現場をともに歩き、感じたことを分かちあい、これからの課題をそれぞれに持ち帰った。

プログラムは午前9時50分に石川町駅に集合し、まずは日本基督教団なか伝道所を訪問。この地域で長らく活動をされておられる渡辺英俊さんから、日本三大寄場地域のひとつである「寿地区」の概要と現状、片隅とされるこの場所から見えてくる私たちの社会の姿、そしてそこからキリスト教をも見直していくことの意味などについて、手短な発題を受けた。それから3グループに分かれて寿地区を歩き、200～300メートル四方の狭い地域にひしめく「ドヤ街」の現在を実際に見聞した。かつての活気に満ちた「日雇労働者の街」が、

「高齢者と福祉の街」へと変貌しつつある。そのことをあらためて実感させられた。

なか伝道所すぐ横の「さなぎ食堂」で昼食をとったのち、午後からはNPO法人在日外国人教育生活相談センター・信愛塾を訪問。外国人児童の学童活動が行なわれているその横で、センター長の竹川真理子さんは、信愛塾の概要と最近の地域の外国人住民・外国人児童たちのおかれている状況を、そして事務局長の大石文雄さんは、神奈川県自治体における国籍差別撤廃運動についての思いを語ってくださった。オーバーステイ・生活困窮・子どもの教育へのハンディキャップなど、外国人住民はさまざまな困難に直面させられている。そのきめめて具体的な状況にむきあいながら、地域に根差してできることを模索している姿が印象的だった。

信愛塾からまた元の道に戻り、今度は寿地区における多文化共生の取り組みとして、「カラバオの会」スタッフの安藤真起子さんからお話をうかがった。安藤さんは外国人・移住者の労働・生活相談にかかわる活動の紹介とともに、安藤さん自身がこの活動にかかわるようになるまでの思いも語られた。外国人住民・移住者の人権侵害は、私

たちの人権侵害でもある。そこでの差別が許されてしまえば、私たちもまた差別され排除されてしまう可能性がある。そのことを等身大に、しかし落ち着きをもって語られる言葉には、現場での経験に基づく一つのゆるぎなさがかもっていたように感じさせられた。

最後にプログラムの締めくくりとして、現場との出会いのなかで感じ、考えたことをそれぞれ話してみる「ふりかえり」の時間を持った。語られた言葉はさまざまであり、「これ」といった結論を

ともに出したわけでもないが、少なくとも今この社会で起きている隣人の「痛み」に無感覚ではあってはならないという思いや、そういう現場が私たちの身近な場所に実はいくつもあるということは、共有されたのではないかと思う。このような「現場」との出会いを大切に、そしてこれでおわりにするのでもなく、いろいろな形で「つながる／つながりなおす」機会をつくっていくことができればと思う。

●金 耿 昊

(キム・キョンホ／外キ協青年の旅実行委員会)